

別新聞以後

「当別新聞以後～状況から・状況へ」
企画室

〒001-0021
札幌市北区北21条
西8丁目2-20-
604 清水方
☎0115770161
編集人
清水 三喜雄

プログアドレス
smikio1948.org/mikio/
メールアドレス
9891 oltg@jcom.zaq.ne.jp

当別短歌会詠草

六月

主去りて咲ほこる花眺めれば去りし姫の思慕ふつつと
春よりの好天どこへか雨ばかり苗もの幾日ポットのままなる
をちこちにつつじ咲き満つわが庭の写真たづさへ夫見舞ひたり
皇居うち五月の緑むせかへり首都東京を忘れさせをり
ああここに雑草ふかき道の端の黒百合かくれ咲くを見つけぬ
昨日けふ相次ぐヒグマ情報に猟友会も招集さるる
風吹けば地面に動くみづならの葉かげ踏まむと遊ぶをさな児
大口ひろみ

長谷川晴枝
吾妻文字
大澤隆子
後藤まゆみ
西口悦子
磯石万里

五日(木) 会である。しかし、その質の高さには感嘆した。

邦楽の「遠」にある「遠」の質の高さには感嘆した。

邦楽の「遠」にある「遠」の質の高さには感嘆した。



現代邦楽の研鑽に感嘆

現代邦楽の研鑽に感嘆

現代邦楽の研鑽に感嘆

現代邦楽の研鑽に感嘆

「北の会」～初夏の箏コンサート

「北の会」～初夏の箏コンサート

「北の会」～初夏の箏コンサート

「北の会」～初夏の箏コンサート

「北の会」～初夏の箏コンサート

「北の会」～初夏の箏コンサート

第四回 カリンバ講演会



飛鳥・奈良時代の恵庭

飛鳥(あしはせ) 国の都とその首長伊奈理武志の墓

六月二 十四日 (土) 恵庭市市民会館会議室で「第四回カリンバ講演会」が開か

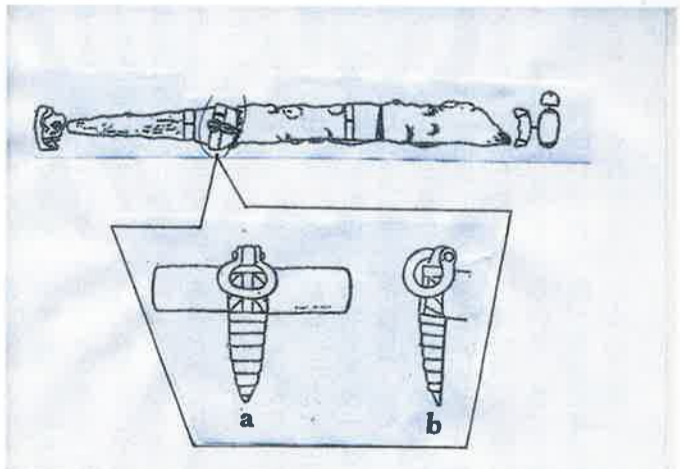
この日のテーマは、やや時代が新しく「飛鳥・奈良時代の恵庭」。講師は大沼忠春さん(元北海道教育庁)。まず、このタイトルの意外性がある。とても惹き付けられる。一本取られたという感じだ。飛鳥・奈良時代というのは、仏教伝来の五三八年頃から平安京に遷都する七九四年頃までの時代。その頃、恵庭は？という話。そこで、大沼

さんが焦点を当てたのが、「蟬形の栗形を有する刀」である。栗形というのは、刀の鞘口に近い差表(さしおもて)に付けた孔のある月形(つきがた)のこと。下緒(さげお)を通し、また、帯に深く差しこまないためのあたりとする。栗の形に似ているというのが、この語の由来か。(小学館版日本国語大辞典)ところが、恵庭の北海道古墳から出土した刀の栗形が蟬の形になっている！これには吃驚だよ。昆虫博士

で考古学に造詣が深い河野廣道氏は「蟬形の栗形を有する北海道古墳出土の刀に就いて」(一九三九年)のなかで、蟬の体は腹部まで写実的に表現されていると感嘆、このような蟬形の栗形を有する刀は、正倉院にも帝室博物館にもなく我が唯一の発見であると指摘していた。

では、この刀、どこから出土したのか。恵庭市内の北西を流れる茂漁(もいざり)川沿岸の柏木東遺跡にある北海道古墳(茂漁2号古墳)か

ら出土したのである。北海道古墳は、江別市元江別にもある(後藤遺跡)、所謂(後藤)人の墓である。大沼さんは、この古墳に埋葬されたのは、首長伊奈理武志であり、この刀は、七世紀頃の遺物ではないかと指摘する。その史料の根拠は、『日本書紀』持統天皇一〇年の条。こう記されている(「越(こし)の度島(わたりのしま)の蝦夷(えみし)伊奈理武志(いなりむし)と(茂漁)みしはせ)の(2面へつづく)



「蟬形の栗形を有する刀」(栗形 a背面 b側面)
茂漁2号古墳(柏木東遺跡)出土の7世紀頃の遺物
《刀身は鉄製で、柄及び鞘は木製黒漆塗と推定され、錆びた刀身の一部に木の断片と、黒漆が付着して居る。柄頭、栗形、鞘尻等の金物は銅製である。鉄製の部分の全長43釐、刀身の長さ33.5釐、平造りの刀で身幅は4.3釐、背幅8釐である。錆はない。》(河野廣道 1939年)
大沼忠春氏は、伊奈理武志への持統天皇からの下賜と推定。

究の最前線に在る瀨川拓郎さんの『アイヌと縄文』(ちくま新書)などを参考にしながら、もう少しこの時代の恵庭の周辺について考えてみたい。

飛鳥・奈良時代の北海道は、縄文時代から擦文時代に変わり、北方からはオホーツク文化も入り込み、次のニブタニ時代(アイヌ文化)へと繋がる時代である。渡島にきたエミシたちは実は、日本海側からと太平洋側からと二つのルートがあり、その背景は違ふ。

七世紀に国家の命で阿倍比羅夫が北海道遠征をします。この遠征は、統縄文人との直接交易を目指す王権が、東北北部のエミシを頭越しにして日本海ルートでの交易体制を確立しようとするものだった。それは実現する。この直後に、東北北部太平洋側のエミシ

力は毛皮・熊の毛皮など。恵庭に進出した和(倭)人たちの富の源泉は交易だった。そうした背景のなかで、柏木東遺跡の北海道古墳を作らせる力と富があった。

移住者の遺跡は九世紀代になるとみられなくなるのは、移住者が擦文人と同化したからだと思う。大沼さんは、エミシが引揚船で多く東北に帰ったという驚くべき説を披露。稲作などが根づかないから。北海道古墳も、その後消えてしまふ。

それにしても、どうして鮮形の栗形をつけているのか。下賜された時から付いていたのか、それとも伊奈理武志が付けたのか。伊奈理武志は「虫」が好きだったのか。なんだか興味

が尽きない。(S)

ちが古小牧方面から上陸し、内陸の千歳恵庭、江別、さらに札幌へと進出します。この地帯を石狩低地帯という。当時、石狩低地帯は、統縄文人の拠点だった。道北と道東はオホーツク人の影響下にあった。統縄文人と進出したエミシの関係は融和的だった。何故太平洋側のエミシは北海道に移住したのか。瀬川さんはこう指摘する。

《北海道との交易を担ってきたかれらにとって、その交易が比羅夫の遠征によって日本海ルートで国家に集約されていく状況は、きわめて深刻な意味をもっていました。かれらの北海道移住は、国家に對抗して統縄文人との交易を確保し、統縄文人を東北北部太平洋側につなぎとめるものだったのです。》

ちなみに、交易品は、サケ・オオワシの尾羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

た

羽・干アワビ・ア

シ

の直後に、東北北部太平洋側のエミシ

この地味な本が四万部近く売れているという。驚きである。専門書ではない啓蒙的な歴史書であるけれど、決して読み易いとは言えない。しかも、テーマとなっている応仁の乱(一四六七〜七七)そのものが、だらだらと一〇年近く続いた東軍と西軍の戦いであり(関ヶ原の東西軍の戦いと比較すれば、

で停滞していたと思われていてあまり人氣がなかった。ところが網野善彦『無縁・公界・楽』(一九七八年)が刊行されてから、いま日本中世史は活気があって面白いのである。若い優秀な研究者も多い。呉座勇一もその一人。本書の面白さは、この分かりづらくて曖昧な応仁の乱を分析

中世史家の間で無論、これらの史料は周知のことであったが、ここまでニュートラルに精緻に読み解いた研究者はいなかったのではないかと。他の膨大な史料なども駆使しながら、まるで日々の動きを追うかのような記述が面白い。しかも記述は、要を得て簡潔で分かりやすい。ここが受けたのではないだる

も歴史家ではないというところ。文章が分かりやすいというよりも軽いのである。呉座は本書のなかでも、マルクス主義史観を批判しているが、それはそれに代わる史観を打ち出しているかと云えば、それはない。新しい史料、あるいは従来からの史料などを精緻に読み込んで、新たな歴史的事実を出してき

て面白いけれど、それだけではないか。あらゆる富の源泉は、「百姓」ら民衆の労働にある。その「あがり」を搾取して天皇も貴族も將軍も台頭してきた諸大名も、賀沢三昧の暮らしが成り立っている。その既得権争いが、戦い・乱に発展するが、どちらが勝つても、そのしわ寄せは結局、飢饉で苦しむ「百姓」らの上に被さって来る。マルクス主義の階級史観を批判するのはそれでいいけれど、一握りの支配階層ではなく民衆はどうしていたのかを浮き彫りにしてくれ、と云

いたい。経覚も尋尊も共に

貴族の位を極めた連中の息子であり超エリートである。坊さんの格好をしているが貴族そのものだ。本書と並行して読んだ四十五年前の『応仁の乱』(若波新書 一九七三年)著者鈴木良一はこう指摘している。

《貴族と大寺の上級僧侶は、ちがうのは頭髪の有無と服装ぐらいで、他はみな血縁から生活様式までふくめて同じといつてよいが、とくに大切なのは、ともに当時「社本所」といわれた領主階級として一体であり、かつては国家権力の一翼をになつていたことである。室町幕府法では全所領を「武家領」と「社本所領」に大別した。》

全所領から「富」を生み出していたのは誰だったのか。こうした根本的な視点のない、あるいは希薄な歴史記述には、どんな新しいエピソードが付け加えられても、所詮それだけの話である。

かつて東洋史家内藤湖南は、古代の歴史を研究する必要はありませんが、《応仁の乱以後は我々の真の身体骨身に直接触れた歴史であって、これを本當に知って居れば、それで日本歴史は十分だと言っ

ていいのであります》(一九二一年)と大胆な発言をして波紋を広げた。ここには史観がある。この見方が違ふのならば、どう乗り越えるのか、現代の歴史研究者たちに問われている。本書のお陰で、四十五年前の鈴木良一『応仁の乱』を読むことが出来てよかった。鈴木良一の辛辣で鋭い分析・記述に感心した。(S)

お知らせ

多民族芸能楽団「わたら」の公演

何だかよく分からないけれど、実力派四人が、時に集まり公演する。

どんな民族楽器や音楽が出てくるのか、お楽しみ!

日時・会場

七月一五日(土) 一八時半開演

新栄寺(札幌市中央区南7・西3)

七月一六日(日) 一四時開演

大成寺(当別町)

前売り 二五〇〇円

当日 三〇〇〇円

＜本の紹介＞

呉座勇一『応仁の乱 ~戦国時代を生んだ大乱』(中公新書 二〇一六年)



英雄なき時代の「リアル」30万部突破!!

応仁の乱

戦国時代を生んだ大乱

その曖昧さは一目瞭然と、覚えられない程の登場人物たちがいて、誰が勝ったのか負けたのか、はっきりせず、昨日の友は今日の敵と離合集散が何度もあり、と時代そのものが分かりづらいためである(まあ面白いと言えは面白いのだが)。日本中世史は、地味

記述するために、この時代を生き延びた二人の高僧の膨大な日記を精緻に読み解いて、まるでこの乱の渦中に入って目撃しているかのような臨場感を出している点だ。二人の僧とは、共に興福寺僧だった経覚(『経覚私記』)と尋尊(『大乘院寺社雑事記』)である。

しかしながら読後、応仁の乱が分かったとはならない。色々と面白かったけれど、それで?という読後感が残る。何故か。それはここに史観がないからではないか。呉座に限らず若くて優秀な研究者たちに共通しているのは、歴史研究者であって



性でも
ずば抜
けた海

たきっかけは、沖縄戦の最中、避難壕で日本兵に怒鳴られて泣いていた我が子を自ら手で殺めた母親の証言に、同じ子を持つ母親として衝撃を受けたことからだと語っている。

この日心を入れて歌った「チビチリガマ」がまさに、「集団自決」に追い込まれた民衆の非劇がテーマである。ガマというのは沖縄各地にある自然壕のこと。米軍の攻撃により住民や日本兵が隠れたところだ。チビチリガマは読谷村にあり、ここに一四〇名が避難していたが、「集団自決」を強いられて八五名（主に子供）が肉親らの手によって殺められた。《泣くなチビチリよ 平和を願って 物語る処子チチリガマ》と歌われています。

沖縄の住民は日頃「獣のように残虐だ」と教えられていた米軍が上陸してきたこ

い張るだけなら単純であるが（元隊長長らは大江の『沖縄ノート』すら読んでいなかった！誰に唆されたのか）、曾野綾子は、「集団自決」した住民らは国に殉じたのであり、その美しい死を軍の強制などというのには人の尊厳を冒しているなどというレトリックを使って大江健三郎を貶め非難した。死者を弔うかのような一見もつともししい言説は、日本軍の沖縄住民強制死を隠蔽するものであって、陰湿な本音を隠す卑劣なレトリックである。人を貶めるような作家が、若い世代に人生論を語るなど、片腹痛い。

性でも
ずば抜
けた海

である。そこを埋め立てて基地を造る？ 冗談じゃない。日本の自然保護団体が本物ならば何故激しく抗議しないのか不思議なほど、それはそれは美しい海だ。

二〇〇四年に、この海に「打ちが」が始まった。住民らは激しく抵抗する。おばさん（会沢芽美）は、初め国がやることだも

うせ無理と眺めていて反対するテント小屋に行ってみると、知り合いがいてさ、知り合いが始まる。海を破壊するように打ち込まれた巨大な杭四本。よく見ると杭の根本に何かが。人間じゃないか！それも年配の女性ら。

会沢さんの一人語り芝居は、「命の海の話」、辺野古の海のことだ。辺野古の近くに住むおばさんが観客に語りかける一人芝居。日本政府は、普天間基地撤去を錦の御旗に、移設ではなく実は新しく強化された米軍基地を辺野古に造ろうとしている。そこまで

「軍命」はなかった、名譽毀損だと訴えた（後に大江が勝訴する）。このバックにいたのが作家曾野綾子らである。軍の強制性はなかったと言

悪い印象がなかったのに、やっぱり権力の装置の一つだったかという本質を見たおばさんは、怒りに震える。そうした思いを一人語り芝居は

演じ語りかけた。いま国は、土砂を搬入して海を埋め立てて既成事実を作って、反対する住民らを諦めさせようと、強権を剥き出しにしてな

りふり構わない行動に出てくる。しかし、辺野古のテント村には、「勝つ方法はあ

る」と言っている。普天間基地を飛び立つた米軍の大型ヘリが、この図書館にぶつか

り墜落炎上したのである。すぐさま、米兵らによって建物も道路も封鎖されて立ち入り禁止となつて、日本の消防も警察も立ち入ることが出来なかつた。いざ何か事件や事故が起きると、沖縄は今も米軍の「占領地」であり治外法権なのだとい



町田宗祐さんの原風景にある「サーターヤー（製糖小屋）」。

う現実を否応なく突き付けられる。

沖繩に住んでいた時ボクは『琉球新報』を講読していた（『沖縄タイムス』も購読したかったけれどお金がなかった）。そこに、基地に消えた集落「復元」という記事が載っていて、自治会が今は基地に消えた集落の復元図を作っているという。その一つが、沖縄市なかばる共栄会の「仲原誌」よみがえる心の故郷」だった。さっそくボクは編集委員長の町田宗祐さんに会うため自宅（沖縄市）を訪ねた。三線（さんしん）が普通に立て掛けてあって、奥さんがホーホーという素朴な菓子焼いてくださった。お話を伺って、『仲原誌』一冊を分けていただいた。誌の口絵に四枚の水彩画が折り込まれていた。石迫グミイ（たぬ池、富田グミイ（丘）、石迫力ジフ（丘）、石迫力ジフ（丘）（十字路）、サーターヤー（製糖小屋）など、長閑な田園風景を描いたもの。町田さんが少年時代の風景を思い出して描いた水彩画だという。今は幻の風景。「サーターヤー」を見ていると、遊女として売られ一〇代

で夭折した歌人よしや思鶴の琉歌が浮かぶ。

島もとなどなど、こばもそよそよと繋ぎある牛の鳴きゆらとめば（島中が深閑としてクバもそよ吹く風に揺れている。こういう時に繋いでいる牛が鳴くだろうと思うと、とても長閑だ。）再び故郷には帰れなかつた遊女の諦め

の気持ちが原風景とともに歌われていて心が詰る思いである。四枚の水彩画もまた幻の原風景である。仲原集落は無いのである。今は嘉手納基地の下！なかばる共栄会といっても、地域はないのである。沖縄戦が終わって住民らは収容所に入れられ、帰ってきたら故郷は米軍基地になっていた！

官房長官が上からの目線で「爾々」という言葉を使えば使うほど真民の心は離れ、怒りは増幅していく。

辺野古の新基地は絶対に建設することができないという確信を持っている。『琉球新報』に、ある日、今やんばる（山原）にイジュの花が満開ですという記事が載った。さっそくボクは、車でやんばるを目指した。本当にやんばるの森はイジュの白い花が満開で、風景が白くなるほどだった。ボクがイジュの花に浮かれていた時、そのやんばるの森のなかの東村高江という小さな集落で大変な抵抗運動が起きていた事を迂闊にも知らなかつた。この集落を困むようにして、あの欠陥機オスプレイの離発着場を幾つも作るうとしていたのである。今も激しく闘っている高江の人達のことを思うと、あの時の自分の無知に臍を噛む思いである。沖縄の事を知らないというのには罪ではないというのには、日本の我々の問題なのだから。

アンコールで、会沢さんは、参加者に力チャーシーを手ほどき。最後は皆で踊る。非情な現実と、それを笑い飛ばす沖縄の柔軟さ。「勝つ方法はあきらめない」と（清水三喜雄）

（清水三喜雄）

ム中部の
アンを訪
ナムによ
ム侵略へ
は、ボク
いどなる
1975
ナムの勝
は他人事
かかった
時代の惨
略への抗
はられてい
ナムの歴
に対する知

てヴェトナムの歴史
については何も知ら
なかったな、と改め
て思い知らされた。
特に、ホイアンの
「日本人町」には驚
いた。「茶屋新六交
趾国貿易絵図」には、
17世紀初頭の日本
人町の情景が生生き
きと描かれている。
ホイアンの海のシル
クロード博物館には、
備前焼などの陶磁器
が多数展示されてい
た。いったい、この

トナムの海港へ交易
に訪れたわけではな
い証拠は幾つもある。
逆に、所謂「鎖国」
政策で朱印船時代は
1635年に終わる
が、その後もホイア
ンに日本人商船が来
ていた証拠もある。
公式の朱印状発給数
を大きく上回る日本
商船の活動もあった
ことも、幾つかの証
拠がある。今後の研
究に待ちたい。

朱印船時代の到来
八幡(ははん)。>
歴史事典はもう少し
慎重に記述されてい
る。朝鮮半島、中
国大陸および南方諸
地域の沿岸や内陸で
行動した海賊集団に
対して、朝鮮人や中
国人がつけた呼び名
語義は「日本人の略
奪」だが、
史上の概念として倭
寇が用いられるのは、
主に14〜15世紀
に朝鮮半島から中国
大陸の北部に展開し

のではなく、400
〜500の船団、1
000〜3000の
歩兵、1000を越
える騎馬隊などで構
成され、沿岸のみな
らず内陸にも侵攻し
ているというから認
識を改めないといけ
ない。高麗や中国
(宋・明)が、しば
しば日本の権力者に
使者を派遣して、倭
寇の取り締まりを要
請してきたのも領け
る規模である。

その構成員も、前
期倭寇では、①日本
人のみ、②日本人と
高麗・朝鮮人との連
合、③高麗・朝鮮人
のみ、などが考えら
れるが、①のケース
は少なかつたようだ。
日本人は対馬・舌岐・
松浦地方の住民。高
麗・朝鮮人は賤民や
流亡農民らである。
後期倭寇も、「真倭」
と言われた日本人の
割合は10〜20%
にすぎなく中国人が
多い。明の支配体制
からはみだした中国
人の密貿易者や流民、
正規の通交者である
ことを証明する「勘
合」をもたない日本
人、貿易許可の得ら
れないポルトガル人
など、中国側からみ
て非合法的な海民集団
が一括して倭寇とよ
ばれた。

16世紀、東アジ
アの海域秩序を乱し
て跳梁跋扈した倭寇
その集団を明の正規
軍が制圧に乗り出し、
戦いに勝利し倭寇の
指導者たちを処刑す
る。その歴史的戦い
を言祝いで描かれた
のが「倭寇図巻」。
(東大史料編纂所蔵)。
縦32センチ・横5
23センチの長大な
絹布に彩色された図
である。明代の工房
で描かれたものだ。
日本史でも絵画史料
として知られていた
ところが近年、中国
国家博物館(北京市)
に、「抗倭図巻」と
いう、「倭寇図巻」
にそっくりな絵巻が
所蔵されていること
が判明した。日本と
中国の3年にわたる
共同研究がなされ、
その成果の1つこそ
が本書である。

似した作品があり、
倭寇を描く絵画も
「倭寇図巻」だけで
はなかつたことが分
かってきた。わくわ
くする。
それにしても、扇と
日本刀を両手に持つ
て突撃する倭寇の姿
は、戦場ではあり得
ないが、中国人にと
つての日本人のシンボ
ルイメージとして繰
り返し描かれている
のには、笑ってしまっ
た。

「倭寇図巻」と「抗
倭図巻」を徹底的に
比較検討して、これ
らが描かれたのが、
贗作のセンターとも
いべき江南の工房
であり、とりわけ蘇
州がその中心だった
ことを突き止めてい
く。それらは「蘇州
片」と呼ばれ、単なる
贗作ではなく名画
の複製・模本という
明代の文化動向のな
かでも重要な役割を
果たしていた。「倭
寇図巻」や「抗倭図
巻」が、「蘇州片」
だとすると、何を基
にしてそれらを描い
たのが問題となる。
いわば、「原倭寇図
巻」はあったのか。
研究は途上である。
本書は他に、文字資
料しか残っていない
が、「文徵明がえが
いた倭寇平定図につ
いての記事」という
ものがあり、それを
解説すると、「平倭

図巻」の存在が浮か
び上がってくる。
また、民間絵画とし
て「太平抗倭図」と
いう絵画史料も紹介
されている。これが
また面白い。城塞で
丸く囲われた太平の
町(現遼寧省瀋陽市)
に倭寇が襲来。民衆
は投石して抵抗し、
明軍は鉄砲を持って
駆け付け、倭寇を撃
退する様子を2メー
トル四方の画面いっ
ぱいに描かれている。
城内で石畳を叩き割
って石を作った運ぶ人
やただただ祈ってい
る人たちが描かれて
生きと描かれている。
日中の共同研究によ
る最新の成果をビジュ
アルで紹介し、多角
的に分析してわかり
やすくまとめた本書
さらなる研究が深化
することを予感させ
る。

「海賊」と「貿易商
人」という倭寇の二
面性を、境界の民と
いう視点から捉える
村井章介教授(日本
中世史・東アジア交
流史)は、前近代に
おいては「領土」も
「国籍」も「国境」
も自明ではなかつた
時代に、人々が境界
域をどのようにとら
えていたのかに注目
すべきだと、こ
う指摘します。
「倭寇はかつて海賊
行為で得ていたもの
を、貿易によって得

寇〜「倭寇図巻」と「抗倭図巻」〜 (吉川弘文館 2014年)



描かれた倭寇
「倭寇図巻」と「抗倭図巻」
新発見の「抗倭図巻」
日中両国に残る
二つの「倭寇図巻」の謎を追う。
〈オールカラーワイドで再現〉
本邦初公開!
吉川弘文館 定価(本体2,500円+税)

なかつた。
ホイアンの
世界遺産)
「四」があっ
然とする
に。そこか
に森林地帯
ソン遺跡
も、レン
遺跡、豊満
を前にし

日本人町はいつ頃形
成されたのか。まだ
研究途上ではつきり
としない。朱印船貿
易(生糸と絹織物を
求めて)で栄え、1
000人以上の日本
人が住んでいたと漠
然と言われているが、
朱印船時代(159
2年に始まる)になっ
て初めて日本船がヴェ

の地下となった航路・
ルートは誰が敷いた
のか。
そこを浮かび上が
てくるのが、「倭寇」
の存在である(とホ
クは推測している)。
◆
「倭寇(わうこ)」
とは、アジアの海を

土豪・沿岸漁民が武
装して私貿易を営み、
しばしば海賊化して
高麗および李氏朝鮮
を悩ましたもので、
後に大陸沿岸で活動
した時には多くの明
の乱民が加わってい
た。朝鮮・明国は室
町幕府にその禁圧を
求め、近世初期にそ
の活動は終息した。

た倭寇と、16世紀
に中国大陸・南海方
面に展開した倭寇で
ある。> (『日本歴
史大事典』小学館)
14〜15世紀の倭
寇を前期倭寇という。
16世紀の倭寇を後
期倭寇という。その
規模も、小舟で箱庭
みたいな海の暴れん
坊などのちやちやも

た倭寇と、16世紀
に中国大陸・南海方
面に展開した倭寇で
ある。> (『日本歴
史大事典』小学館)
14〜15世紀の倭
寇を前期倭寇という。
16世紀の倭寇を後
期倭寇という。その
規模も、小舟で箱庭
みたいな海の暴れん
坊などのちやちやも

本書はまさに、この
後期倭寇が活躍し、
それを取り締まる明

研究が進むと、孤立
していた作品だと思
われていた「倭寇図
巻」には、多くの類

「国籍」も「国境」
も自明ではなかつた
時代に、人々が境界
域をどのようにとら
えていたのかに注目
すべきだと、こ
う指摘します。

「倭寇はかつて海賊
行為で得ていたもの
を、貿易によって得

られるようになった
ということ。つ
まり、倭寇というの
は、境界がある条
件において海賊行為
を行ったときに、そ
の海賊行為の側面を
とらえて中国や朝鮮
がつけた名前なので
す。その実体はあく
まで境界人としての
倭人であり、彼らや
彼らの子孫は、倭寇
沈黙化後には貿易商
人として認識される
ようになった、とい
う大まかな流れが見
えてきます。>
(「海がつかないニッ
ポン」2011年)
ヴェトナムのホイア
ンの「日本橋」(1
593年)に立って
秀吉や家康の時代に
朱印船貿易の隆盛が、
この橋を、この日本
人町をつくったのか
という感慨に打たれ
ながら、しかし、こ
の航路は倭寇たちに
よって開かれて、そ
の上立って、「朱
印状」という公のレ
テルが貼られたので
はないのか、という
思いもする。>
(清水 三喜雄)

